

# —ランウェイ

「三宅祭に行くの？ それなら、ファッショントリオは絶対観なきやね」

二〇一一年秋、三宅村で出会った地域の方の声を頼りに、三宅高校学園祭にて開催されるファッショントリオへ訪れた。これは筆者にとって、今でも鮮明な記憶を呼び起させられるくらいに衝撃を与えるものであった。

三宅村のなかで「ファッショントリオ雑誌ひとつとっても購入することが難しく、ましてショート・ドレスを制作するための布地や手芸用品などは、村じゅうを歩いても見つからないことを事前のフィールドワークにより知っていた。三宅村で、ファッショントリオを開催できる…ということに、大変失礼ながら、まづは驚きを隠しきれなかつた。

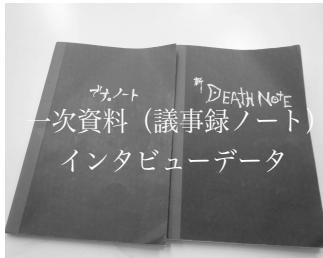
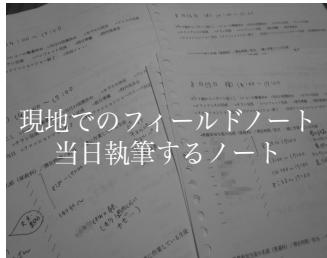
それ以上に、彼らのショートは心から素晴らしいものであった。華やかな音楽を交えながら、次々に目の前を通り過ぎてゆくストーリーに心が踊つた。うつくしい色とりどりのドレスをまとい、モデルの生徒たちの歩くランウェイは、特別な輝きを放つている。

近年は生徒数の減少により、全校生徒が総出でショートを運用しているという。専門的に被服を学んでいるわけではない生徒をも巻き込んで継続され続けているこの事実は、その準備過程やショート当日が彼らにとってたいせつなものであることを裏付けている。

一九八一年度から、避難中も途切れずに行われたファッショントリオ。なぜ彼らは、ショートを続けているのだろう。それは一緒に同じ空間を共有し合いながら手を動かす、「ミニユニケーション」のなかにヒントがあるのではと考え、彼らのショートの準備段階から当日までのフィールドワークを行うことにした。

これは、三宅村の「じま」を読み解くヒントともなった。二〇一一年夏、筆者は三宅村に滞在し、高校に通いながら彼らと過ごし、三宅村へ「馴染んでゆく」過程を経験した。例えば、服装。彼らは制服で登下校をするが、それ以外ではTシャツにハーフパンツといふラフな服装で過ごしている。「だって、三宅でおしゃれしたら、何こいつって目で見られるじゃん」「東京で買った服は東京でしか着られないよね」ある場所では、ある場所での特有のルールがある。それは明示化されてはおらず、その場所で過ごすことで少しづつ

## 〈フィールドワークにより取得したデータ〉



参加した生徒の名前、服装、滞在時間、作業する机の位置をテンプレートとして書き留めていた。また、現場での会話や出来事などを書きとめ、その日のうちに細かな描写を加えたフィールドノートに書き起こす。

議事録ノートなどの一次資料の収集を行い、適宜注釈を加えてデータ化していく。また、調査対象者のうち学年の異なる三名を抽出し、インタビュー調査も行った。各 20 分～、3 回にわたり実施している。

教室室内に貼り出されている、彼らの制作ドレスノルマポスター、ショーカーの構成を考えるホワイトボード、完成ドレスの棚の写真を毎回撮影し、その変化を追った。日々注意書きや落書きが増えていく。

夏期休暇中 ファッショショーンショー準備	2012年8月7～31日 水曜を除く平日 14時～17時（被服室）
二学期中 ファッショショーンショー準備	9月24～28日 水曜15時40分～17時 (被服室)／学校外
校内発表会	9月29日 13時～14時半 (学校内)
ファッショショーンショー当日	9月30日 9時～15時(学校内)
ファッショショーンショー後日	10月1～2日(学校外)

本調査期間

その場に応じたふるまいや特有の言葉が身に付いてゆく。彼らがファッショショーンショー準備を行う「被服室」のなかに話をつつしても、まったく同じことが言える。例えば、布の整理の仕方。彼らは共に過ごしていくうち、「ぱきっとした黄色」と「ふんわりした黄色」の色分けができるようになつてゆく。居心地のよい作業空間をつくるためには、とても小さな積み重ねによる「コミュニケーション」が存在する。筆者はこのような彼らの些細なふるまいや言葉に着目し、フィールドワークを行つた。彼らと過ごした日々の記録から、彼らのつくる「居心地よく、生産的な場」にある特徴的なコミュニケーションを抽出することが本研究の目的である。この記録は三宅村の文化を知ることができると同時に、私たちの日常的なコミュニケーションとも繋がりをもつはずだ。

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士課程

加藤文俊研究室 大西未希

@mikitaro\_